
ナイト・シフター

青羽根なおみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイト・シフター

【Nコード】

N3788F

【作者名】

青羽根なおみ

【あらすじ】

奇妙な男・斎之秋葉とあきのあきと出会ってから、昼と夜とで性格が“変換”してしまうようになった雪名。消極的で自分に自信が持てない昼の雪名と、積極的に自信過剰な夜の“ユキナ”。できるはずないと思っていたことを次々と現実に変えていってしまうユキナに雪名は憧れながらもとまどってしまう。ユキナと雪名は同じ人間のはずなのに……。

プロローグ

この世界には怖いものがありすぎる。

だから、いつもおとなしくしている。

（――雪名ちゃんゆきなちゃんは小さいころからホント、手のかからないコよね）
口をひらくよりも、耳を澄ますこと。

（――それにくらべて上の月世ちゃんつきよちゃんはねえ）
息をこらして、やり過ごすこと。

まるで、白い雪にうまれて、身を隠すウサギ。

それが、私のまいにち。

時々、胸の真ん中を冷たい風が吹きぬけていくような気がする。
けど、やめるわけにはいかない。

――生き残るために。

1・逃げ込んだ先に

胸が痛い。肺が悲鳴をあげている。

荒い呼吸のせいで、ぜいぜいと痛いくらいのどが鳴っている。
足ががくがく震えている。何度も転びかけながら、走る。

（――逃げなきゃ、いけないのに！）

初めて来た街で、どっちに走ればいいのかなんてわからない。

ただ、あの人たちの怒鳴り声や、追いかけてくる足音から逃れるために、暗く細い道は無我夢中で走った。

あせるほどに、足がもつれてしまう。

追いつかれてしまう。

つかまったら、何をされるかわからない。

こわい、こわい、こわい。

（こんなとこ、来なければよかった）

いまさら後悔したって遅いのに。

酸欠で痛みだした頭で、なんども繰り返す。

来なければよかった。

ここは、私なんかの来るべきところじゃない。

おとなしいだけの、いつも人の影に隠れているような、弱い女の子が来るべきところじゃなかった。

なんである時、顔いてしまったんだろう。

（……嬉しかったから。声をかけてくれて）
こんなことになるなんて。

（彼女が悪いわけじゃない。きっと運が悪かっただけ）

「……でも、逃げた」

かすれて、しゃがれた声。

その声に、止まりかけていた足が、止まった。

もうどうでもいい気分になった。とても疲れていたし。

立ち止まってしまったら、立っていることもできなくなって、その場にしゃがみ込んだ。

どこだかわからない、暗い路地。

両側をビルにはさまれているせいで薄暗い。

街灯がひとつ、ぽつんと立っているだけ。

「もう、こんなに暗くなってたんだ。……きつと、お母さんにすごく怒られる」

どうでもいいことを考えた。考えただけじゃなく、知らずに口に出していた。

背後から足音が近づいてくる。

頭がぼーっとしてきた。

それから、すごく悲しくなって、泣きたくなった。
なんでだかわからない。

彼女は私を見つけてくれた。

連れ出してくれた。

そして、

見捨てて、逃げ出した。

ただ、それだけの事なのに。

2・斎之秋葉の招くもの

——その男の名前は、斎之秋葉といった。

「おはよ、ユキちゃん」

教室に入ってくるなり、小暮京子が私の座っている席に走りよって来た。

小暮さんはキレイな子だ。

手足も体もほっそりしていて、余計なモノがまったくついてないかんじ。

生徒に不評の長すぎるスカート丈や重たい色のブレザーも、彼女が着るとお嬢様っぽくて、すごく可愛い。

「昨日ごめんね。大丈夫だった？」

まるで、たいしたことない事みたいに言うから、私の声も平坦なものになる。

「うん。大丈夫。平気」

ほんとにどうでもいいことみたいに。

私がどうなろうと、どうでもよかったってこと。

でも、彼女の目は笑ってなかった。

こんな顔もするんだ、優等生。

そう。小暮さんは優等生。口に出していったら、笑っちゃうようなコトバなのに、彼女にはよく似合っていた。

頭が良くて礼儀正しい。一応、お嬢様高校といわれている（笑われている？）この学校でも珍しい存在。

「ほんと？心配してたの」

彼女が小首をかしげて——私の目を覗き込みながらいう。

「そんなこと、いいのに……」

気弱そうに首をふる私。

心配？私を？

それとも、私が昨夜見たことを誰かに言っんじゃないかって……心配してるのはそのこと？

「そっか。だったらいいの」

一瞬。

彼女が勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

笑い、というには酷く歪んだ口元。

小暮さんはわかつているのだ。

昨日のことを私が誰かに言っただころで……誰も信じたりしないってこと。

美しく、何でもできる彼女と、なんのとりえもなく地味な私。

誰も信じない。

それどころか、私が小暮さんに嫉妬でもして、悪質な嘘についていると思われるだけだろう。

私だって、この目で見て、聞いていなければ、きっと信じられない。

「ふざけんなよ、あの金がなかったらどうなるか分かってんのかよ！」

知らない男達。私たちと年は変わりそうにないけれど……かかわったことのない、乱暴な言葉。

何の抵抗もできないまま裏道に引きずりこまれ、5、6人に囲まれてしまうと——私はほとんどパニック状態になってしまった。

ちゃんと目は開いているはずなのに、耳は聞こえているはずなの

に。

わからない。なにを、いつているの？

酷い言葉を金切り声でさけんでいるのは……小暮さん？まさか。男達が口々に怒鳴りちらしている。

『はやく金を』

『通帳どこにやったんだよ』

『おまえがあいつにやらせてることくらいわかって』

『この女突き出すしか』

『馬鹿、金なしで許してもらえるわけ』

どん、と背中をおされた。

我にかえって、ふりむくと、目が合った。

表情のなにもない、

(……ほんとうに、ガラス玉みたいな目)

それから無我夢中で逃げた。

小暮さんが、私を突き飛ばして……さすがに男達が驚いたその隙に、私をおいて逃げたのだと理解するのにだいぶ時間がかかった。理解してしまったら、走れなくなつて。

座り込んで、背後に近づいてくる足音を聞いていた。

足音は一人のもので、急ぐ様子もなくゆっくり近づいてくる。

——あの人たちじゃ、ないの？

ようやく、その可能性に気づいて、のろのろと振り返る。

黒い革靴の足元が見えた。
ゆっくり視線をあげると、

（そう。あの人

——あの男の名前は、斎之秋葉）

3・ユキナ、しこたま疲れる

——その男の名前は、

……なんてったつけ？

まあ、どーでもいいわ。

なんか、とくに好みの顔でもなかったしな。

2度と会わないだろうし。

行こうにも、あんな入り組んだ路地ばっかりの街、迷子にならずに目的地につけるとは思えない。

どんな経緯だったか——なぜか、ぼんやりしていてよく覚えていない——、薄暗い喫茶店のような場所でお茶を飲んで、それから最寄の駅まで送ってもらった……らしい。よく覚えていない。

……覚えていないなんて、かなり奇妙な状態なのに、気にならな

い。

もっと重要なことが、目の前にある。

「どつれにしょーおーかなあー」

花壇の中に敷き詰められた白い玉砂利のなかから、手ごろな大きさのものを選ぶ。

でかすぎるのはやばい。

あたしがやりたいのは、破壊活動じゃなくて示威活動……もとい、か弱い乙女の救助信号。たのむぜ、姉ちゃん。

弧を描いた石が、二階の暗い窓にあたる。

あたった、はず。

あたしの耳にはその音が聞こえなかったが。この程度の距離を外

すはずもない。

……反応なし、か。

現在、午前1時。

明日（いや、もう今日か）は月曜日。この時間なら就寝しているはず……母ちゃんの目を盗んで夜遊びとかしてなければ。

「……もすこしでかいのにしてみつか」

ふたたび玉砂利をかき回す。道を歩いてる人がウチの庭を覗きこんだら、即座に不審者発見だ。

母ちゃんが丹精込めて世話しているイングリッシュガーデンを荒らしてしまった。すまん。……ところで、どこら辺が英国風なんだろう。庭の端っこに松とかあるしな。

第二投。

——がしゃん。

まて、がしゃんてなんだ。

一瞬、当初の目的を忘れて、逃げの姿勢をとってしまった。ガキのピンポンダッシュか。

暗かった窓に明かりがついた。石を当てた月世の部屋だ。幸い、両親の部屋は暗いまま。

窓が開いて、月世が顔をだした。不安そうな顔で下の道を覗き込んでいる。

その視線が動いて……あたしと目が合った。でかした、月世。さすがあたしの姉ちゃん。

が、月世はなにを思ったのか、あたしから視線をはずし、さつきより真剣な目で道路を検分しだした。

いきなりどうしたんだ、この女。

「月世。どうしたの？」

靴と靴下をディパックにしまい、肩にかけなおす。

「雪ちゃん、ねえ、変なひと見なかった？」

「変なひと？」

夜中だし、隠密作戦実行中だし……ということで、月世もあたし

も小声で話している。

「さつき、なんか窓にあたったの」

「あーそれは、」

雨どい強度確認。げしげし。蹴っても問題なし。

作戦実行ッ。……って程のことでもない。庭から雨どいと屋根伝いに二階にあがる。余裕余裕。

「あたし。ごめん。……よかった、窓ガラス割れてなかった」

「ぎえッ、ユキちゃん、なんでここにいんのッ」

耳元でいきなり叫ぶ月世。

あたしはとつさに耳を押さえた。

窓のサッシに片足かけた状態だったから、両手を耳にあててしまった場合……後ろにぐらりと上体が傾いだ。

「げ。」

「ゆ、ゆ、ゆ、雪ちゃんッ」

あわてた月世が無理やり部屋の中に引きずり込んでくれなければ、女子高生・理由なき自殺事件になっているところだった。

お互い三十秒ほどだまって、荒い息を整えたのち。

「じゃ」

「じゃ、じゃねーだろ、雪ちゃんッ」

とびきりの笑顔ととびきりサワヤカナ角度で右手をあげて去ろうとしたのに、月世に襟首をつかまれてしまった。

「ちよ、服が伸びるッ。まだ1回しか着てないヤツなのに」

「そんなことどうでもいい。」

あんたどうしちゃったの？おかしいよ、今日の雪名」

「……そっすか？」

「その返答がすでにおかしいだろ」

はああーと深くため息をつく月世。

なにその、わざとらしいの。言外に罪悪感を煽ろうとする仕草。が。

直接話法以外にわざわざ反応して差し上げるほど義理堅くはない。

そう、あたしはあえて空気を読まない女。

「……明日」

気弱そうな笑い。

「え？」

きよとした顔をした月世。

「明日、全部説明するから。今日はもうおそいし……自分の部屋、いつていいかな？」

お望みの、“いつもの雪名”っぽくいつてやる。

単純で脊椎反射多めの月世をだまぐらかすなど、このあたしには造作のないこと。

「あ、うん。わかった」

——よし、おちたな。

釈然としてない月世の表情になど、まったく気づかないふりをして、部屋をでる。

「ふ、ちよろいもんよ」

片方だけ口角を上げる悪人笑いなどしつつ、自分の部屋に向かう。暗い廊下。

明かりのスイッチは近くにあったけど、ただか10歩ないような距離でつけることもないかと、そのまま歩く。と。

「あ、あの？」

なんかいた。

あたしの部屋の前。ドアのまん前に。

暗い中でうずくまるその姿は。

「お、お母様……なんでそんなとこいの？」

そのわけのわからないシチュエーションに内心かなり怯えながら、話しかける。

「……あ、雪名ちゃん」

ぼんやりした目であたしをみる。どうやら今までうつうつとしていたらしい。

「ど、どうも」

「……雪名ちゃん」

「うん？」

「ゆ、雪名ちゃんが不良になっちゃうなんてッ」

「ふ、不良？ いまどき不良？——じゃなくて、ちょっと帰る時間遅くなっただけで、不良とかいわれても」

「それだけじゃないわ！」

本気で泣き始めている。夜中で寝起きなのに、なんでこんなに元気なんだ、この女。

「……何？」

おとなしく聞くことにした。逆らったら、めんどくさいことになりそうな予感がする。

「せっかく1週間煮込んで完成したデミグラスソースを使ってシチューつくったのに、だれも食べてくれないんだもの。」

パパも月世ちゃんもお夕飯いらないって……パパなんてお夕飯いらないって電話してきたの、9時だったのよ、9時。信じられないッ」

信じられないのは息継ぎ一切なしで言い切ったあなただよ、ママン。

「ご、ごめん、連絡なしで家族の拘束——じゃなくて憩いの時間に参加できなくて。」

1週間と1日煮込んだデミなんとかシチューは明日の朝ちゃんと食べるから」

「……1週間煮込んで完成したデミグラスソースを使って作った1日煮込んだシチューよ」

「……」

心底どうでもいい訂正事項に無言で深く頷いて、母ちゃんをどけて、自分の部屋にはいる。

ディパックを床にほおり出し、そのままベットに倒れこんだ。

……疲れた。

夜中にこっそり帰って来ることは、ほとんど問題にされてなかった

たな。

——こんなことなら、もっとガンガン遊んでればよかったのに。なんだっていままでのあたしは、門限7時（……）を厳守していたのか。

わからない。なんでだろう。

それより、なんだってあたしは、あの女……小暮なんかについていったのか。

あの、ナゾの哀れみの視線でヒトを見る女。

ヤツに金借りたワケでもないのに、なんであんな目でみられなければならぬのか。

眠くなってきた。

……廊下の明かりを消したままで、扉前待機してたのはなぜなのか。

（演出？演出なのか、母ちゃん）

だとしたら、あたしはあの女を甘く見ていたということになる。

1週間かけて料理するなんて、主婦は暇なのか。それをいったらあたしは抹殺されるだろうか。

眠たすぎて、思考がとりとめなくなってきた。半分夢の中だ。

もう今日はこれで終わり。

すべては明日。

考えることもデミなんとかも、明日のあたしに任せよう。

そうきめると、あたしは意識を手放す。

本格的な心地よい眠りに入るとき、“あの男”がいった言葉を思い出したけど……それもすぐ眠りの波にのまれていった。

4・雪名、たじろぐ

昼休みに一人でいるのは普通のことだった。

大抵自分の席で、外を見ながらお弁当を食べる。

寂しいとは思わない。小さいころから、こんなものだった。一人には慣れている。

……慣れている、けど、それが楽しいというわけじゃない。

いつものように机の上にお弁当をひろげる。

お弁当箱の蓋をあけ……そのまま閉めた。

幸い、私の奇妙な行動に注意を払っている人などいはしない。

(こ、これは一体……)

勇気を出して、もう一度お弁当箱の中身を覗き込む。

「……」

見間違ひ、もしくは幻覚であってほしいという私の希望(妄想?)は打ち砕かれた。

お弁当箱のほぼ半分を占める巨大ハンバーグ。当然、お母さん入魂のデミグラスソースを纏っている。

今日の朝食は、なぜかすさまじいボリュームのビーフシチューと手作りのイギリスパンだった。朝からあの量はきつい。けれど、お母さんの期待の込もった視線のせいで、食べなくてはいけないような気になってしまう。

(味の系統がかぶってる……というか、まったく同じ)
もしかして、

——か、家庭内イジメ?

それはないと思うけど。ないといいなと思うけど。

(……いただきます)

お箸を手にして食べようとしたけれど……私はすぐにお箸を置いてしまった。

お弁当の内容のせいだけではない。

今朝の、小暮さんのやりとりを思い出してしまったから。考えたって、どうしようもないこと。

わかってはいるけれど、気持ちが沈みこむのは止められなかった。もう、彼女が私に話しかけてくることなんてないだろう。

お互い、そのほうがいいだろうし。

日曜日に、遊びに誘ってくれたのも、きっとなにかの気まぐれだったのだろう。

思考を整理すると、諦めのような感情がわき上がる。ただ沈んでいるよりはマシ。

諦めてしまえば、別の何かを選ぶ余地は生まれる。

今の場合は、

(とりあえず、食べよう。

昼休み終わっちゃう)

そういうことだった。

月曜日の放課後は何の予定もない。図書室によって本を2冊借りて、そのままどこにも寄らずに家に帰り着く。

学校から家までは、徒歩で10分たらずの距離。電車がバス通学だったら、どこかに立ち寄る余地も生まれるのかなと思う。……たいてい変わらないかもしれないけど。

一階の居間をのぞくと、姉がいた。

ひとつ年上の姉は、私と違って外交的で友達も多い。こんな早い時間に家に帰っているなんて、めずらしいことだ。たいてい、遅くまで友達と遊んでいるのに。

「た、ただいま……」

ただ帰宅の挨拶をするだけなのに、緊張してしまう。

いつもはたいして私に注意を払っていない姉が、じっと視線を向けていたからだ。

「な、なに？」

「話すつてゆった」

「え？」

びっ、と人差し指を突きつけてきたので、思わず後ろに半歩引いてしまった。

「明日話すつていったじゃん。明日になったんだから、話してよ」

「あ、……」

思い出した。

そういえばそんなこともあった。

ほとんど、ごまかす為にいったことだったけど、姉はちゃんと約束として覚えていたようだ。

「えっと、昨日はちよつと色々あって……」

何の説明にもなっていないことは、自分でもわかっていたけれど、仕方がない。

私にだって、いったい何が起こったのかわかっていないのだから。

小暮さんに彼女の事情など聞けないし……適当に誤魔化して話しかないだろう。

「いろいろつて……雪ちゃんがバイオレンスモードになるくらいのこと？」

「ば、ばいおれんすもーどつて……」

なにそれ。

姉はときどき大げさすぎる物言いをする。

さすがに今回表現はちよつと……と苦笑しかけて。

私は文字通り凍りついた。

——思い出した。

いや、この表現は正確ではない。私はひとつも忘れてなどいない

のだ。だから、思い出したではなく。
ようやく認識できたのだ。

昨日の私の行動の異様さが。いつもの私とはまったく違う思考が。

いつもの私なら、あんなことはしない。

夜中に帰宅したら……仕方なく、怒られるだけ。
姉を起こして、2階から忍び込もうとなんてしない。

（月世、なんて呼び捨てになんかしない）

お母さん相手に、あんな、軽くあしらう様な話し方なんて出来ない。
い。

いつも、相手のいいように、望むように、聞いたり、話したり、
行動したり。

——それが、私なのに。

自分がやったことだって、覚えてる。

そのときは、そうすることが自然に思えたから、そうしただけ。
でも、こんなのは、私じゃない。

あの男の人がいつていたことを思い出す。

——嫌な声だと思った。

いやな、声。

優しく気遣うような口調。

ああ、なんていやな、声。

『君は、自分がキライなんですわね』

そんな優しい表情で、
本当のことばかり言うて。

5・雪名、決意する

結局、姉にはなにも話さず、家を出てきてしまった。

それどころではなかったから。

ビルとビルの間に、夕日が消えかけている。

腕時計で時間を確認して、ずいぶん日が暮れるのが早くなったな……なんて暢気に考えている場合じゃない。

こんなところ、絶対戻ってこないって思ってたのに。

「……なんで来れちゃったんだろう」

一度しか来たことがない街。

地理にも詳しくなくて、しかも前に来たときは夜だったから、どこに何があるかなんてまったく覚えてないのに。

私は歩いた。

迷うことはなかった。

なぜ、駅をおりてからすぐ、あの花屋の角をまがったのか。

なぜ、大通りから、あのちいさな路地をえらんだのか。薄暗い路地を、幾度も幾度も角をまがって進んでいくのか。

……なぜ、疑問に思おうとしないのか。足を、止めないのか。

生まれたさきから、消えていってしまう思考。

そこにたどり着いたとき、疑問はたいしたことのない事柄だというように薄れていく。

まるで、毎日歩いている通学路……考え事をしていたら、いつのまにか家についてしまっていた時のような感じで。

（むかし、こんなところを歩いたことがあったような……なんだろう

う、この感じは）
かすかな違和感だけを残して。

夜と昼とで、その店の印象はさすがに違ったけれど。
（ここだ。間違いない）

——あの男と話した喫茶店。

古びたドアと“営業中”の札を睨みながら、私は緊張をほぐすように息を吐き出した。それでも、ちっとも楽にはならない。肩と首がガチガチに固まって痛んでいる。緊張すると、いつもこくなる。

いたたまれないような、胸のざわめきが止まらない。
逃げ出したい。

でも、また、“あんなふう”になってしまったら？

姉や母は、あの時の私をどう思っただろう。

彼女たちは、家族だからまだいい。

でも、ほかの誰かの前で“あんなふう”になってしまったら？

なんて思われるだろう。

どんな目で見られるだろう。

なんて言われるだろう。

想像しただけで苦しくなる。

首を振って、架空の痛みを振り払う。

「……あの人にあってから、おかしくなった」
ぼんやりして、とりとめない記憶。

でも、あのとき、何かが自分のなかで切り替わってしまった……
気がする。

『君は、自分がキライなんですネ。』

うるさい。

『——“ひとり”だから。』

なにがわかるの。

わかってほしくもない。

(土足で他人の心に入ってくるヒトたち)

(なにもわかってないくせに)

(なんでそんなこというの)

——どうしてこんなにも、他人の視線を恐れているのか。
そんなこと、考えたくもない。

頭が痛くなりそうだった。

私はあわてて、目の前の扉に視線をもどす。

とにかく、今はあの人に会うしかない。

ここにいかどうかはわからない……いない可能性の方が高い、
というか……いるわけない、かも。

いたとしても、なにを話せばいいのだろう。

(……私、あなたと会ってからおかしくなってしまったんです……
?)

別のイミの告白のようだ。

「でも、他に手がかりなんか無いんだから」

いいわけするみたいにつぶやいて、ドアのノブに手をかけようとした……それよりも一瞬はやく、扉があいた。

「——痛ッ」

突然、勢いよく開いた扉に、肩をぶつけてしまった。

(……額でなくて、よかった)

さすがにそれは恥ずかしすぎる。

店の中から扉を開けたのは、私と同じくらいか、もしくは少し下の年齢くらいの少年だった。私を見上げる目が鋭い。白目が澄んで、青みがかってみえる。

「あ、すみません……」

ぶつけられたのは私なのに、ついクセで謝罪の言葉が出てしまう。
このクセは、姉に注意されたことがある。

(……悪くない人間が謝るのって、絶対おかしいよ、って)
卑屈だっことをいいたいのだろう。

でも、なんの問題も無く事が済むなら、いいんじゃないかな、と
思う。

なんの問題も無く……。

「どけ。」

ブス。

ジャマ。」

「……！」

た、確かにしばらくぼけっとしていたかもしれない。

でも、突然扉がひらいて、注意不足はお互い様なはずで、痛い思
いをしたのは私なわけで。

頭の中をいろんな思いが一瞬にして駆け巡った。

けれど、けっきょく何もいえないで、私は“ジャマ”にならない
ように扉から数歩離れた。

少年は一瞥すらなく歩き去った。

——神様、私はなにか悪いことでもしたんでしょうか？

最近ロクな目にあっていないような気がするのですが。

ふうつと、地面を見つめてため息を零す。

「あ、」

足元に、なにか落ちている。

鍵……大きさからすると、家の鍵かなにかだろうか。

私はそれを拾い上げた。

これは、たぶんぶつかった拍子に“彼”が落としたものだろう。
渡してあげないといけない。

けど、あの睨み据えるような視線を思い出すと、躊躇してしまう。

もしも、万が一、この鍵が彼のものでなかったら。

また、

（ブスとかブスとかブスとか……言われそうだ。

いや、確実に言われる。ものすごくそんな予感がする）

その単語は、自分自身に言うのはどうってことなくても、他人に言われると破壊力抜群なのだ。

（ど、どうしよう……）

鍵を握り締めたまま、オロオロしてしまう。

家の鍵を失くしたりしたら、困るだろうな。防犯上でも、すごく不安になるだろうし。

でも、怖い。

見つけなきゃよかった。

……でも、見つけてしまったし。

そんなふうに、ひとり悩んでいる間に、彼は路地の角を曲がろうとしていて……このままでは、見失ってしまう。

「あ、あの、ちょっと待って」

あわてて声をかけると、彼が立ち止まったのがみえた。

夕日の赤い光はもうすっかり消えてしまっていて、街灯のぼんやりとした光が路地を照らしている。

「こ、この鍵……」

彼は立ち止まったまま、こちらに来る気配は無い。仕方なく、私は彼のほうへと歩き出した。鍵を届けるために。

まだ、あの目が怖くてしょうがなかったけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3788f/>

ナイト・シフター

2011年1月19日02時33分発行